



続:午睡とピクニック # 5



ふありの書斎

2024年6月10日 19:50

カタッと小さな音がした。

ぼくの心臓が早鐘を打ち始める。

「あなたは少し待っていてね、こゆりちゃん。少し、^{あおい}碧に言っておかなければならない事があるの」
姉さんの声だ。

「...碧」

「姉さん？」

ベッドの上に、ストールを抱きしめたまま、黙り込むぼくの背中に、姉さんが、そっと手を伸ばし、上下にさする。

「私、帰らせてもらうわね。目的の話も出来たし、十分だわ。それから...」

姉さんは、ひと息ついて、にっこり微笑んだ。

「おめでとう。ふたりの幸せを祈っているわ」

という、良く分からない言葉をぼくの耳元でささやく。そして、妖艶な笑みを浮かべながら、我が姉ながら、どうしたらいつも意味深な台詞を言えるのか分からなかった。

姉さんは、フフッと笑って、入れ替わりに、いつものキャミワンピース姿のこゆりが、おずおずと部屋に入ってくる。

「...あおちゃん」

いつもの、か細い声音で、こゆりが、ぼくの名を呟く。

「...こゆり、君をあの暗い部屋から、ぼくの腕の中に連れ去ったのは...間違いだったのかな...」

「そんなことない。ごめんなさい...ごめんなさい...あおちゃん...」

ふわっと野の花のブーケのような、あまい匂いが、ぼくの背中ににしがみつく。

「謝らなくていいんだ。こゆりは、何ひとつ悪くないよ」



白いお花、大好き

「そ...それなら、あおちゃんも謝らないで」

こゆりは、ぼくが抱きしめているピンクのストールを見つめ、

「...あおちゃんは...あおちゃんは...ずっとわたしを大切にしてくれた。それなのに、わたしはMO-VEの時みたい、いつか...いつかあおちゃんにも捨てられる日が来るんじゃないかって。ここを出ていって、言われませんか...ずっと不安で、眠ることでしか忘れることが出来なくて...。傍^{そば}にあおちゃんが居ないと不安で...怖かったの。あおちゃんが、大好きって言ってくれたときも、嬉しかったけど...こんな幸せも、心の奥から信じられなくて...」

こゆりは、ずっとうつむいたまま、ぼつりぼつり話す。

「ぼくは、そんな無責任なことは言わないよ。もしも、こゆりがぼくのせいで、失ってしまったものがあるのなら、どんなことでも責任取るよ。だから、ぼくに言って」

ぼくは、こゆりの薄い肩に、ピンクのストールをふわっと掛け、ぎゅっと抱きしめる。



お気に入りのピンクのストール

「あおちゃんの...バカ...」

「え？」

キョトンとするぼくに、こゆりが下から見上げて、ぷくっと頬を膨らませる。

「...MO-VEの時に、言ってくれたじゃない。『こゆりの代わりは、一人も居ないよ』って。わたしのこと、大切なら...取ってほしい責任はひとつだけ。これからもずっと、あおちゃんの傍に居させて」

ぼくは...

ぼくは大馬鹿だ。なんで、こんなに大切なこと、こゆりに言わせてしまったんだ。

涙が頬をつたう。さっきから、ぼくは格好悪い事だらけだ。ほら、こゆりが、びっくりして不安そうな顔になる。そして、いつもとは逆に、ぼくの頬をつたう雫に、花の蕾のような唇で優しく拭う。

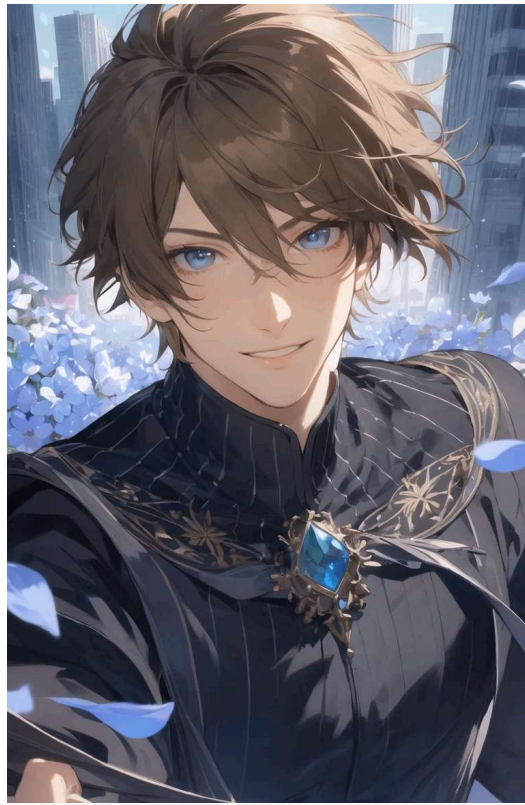
「ぼくは、宇宙一鈍感で、宇宙一の幸せ者だね」

ぼくは、半泣きの状態で、くしゃっと笑む。

「あおちゃん、大好き」

こゆりの華奢な身体を抱きしめ、サラサラの透明感のある、髪に顔を埋めた。それから、顔をあげて、背筋をピンと伸ばし、こゆりの小さな手を持ち上げた。

かなで
「奏こゆりさん。ぼくと結婚して下さい」



ぼくと、結婚して下さい

ぼくの求婚に、こゆりはこれ以上ないくらいに、幸せそうに、
「...はい」

と、笑みを浮かべたまま頷きかえしてくれた。

すると、にっこり微笑んでいたこゆりが、突然、口元を押さえ、ベッドから降りて、口元を覆った。可憐な顔を、苦しそうに歪める。

「ご...ごめんなさい。あおちゃ...っ」

それだけ言うと、こゆりは数歩後ずさり、身を翻して寝室を出ていった。求婚を断られたわけではない。でもまた、家を出ていくのではないかと、不安になり、ぼくはこゆりの後を追った。

こゆりは、洗面所にいた。ツンと酸味のある匂い。こゆりは、洗面台に身を屈めて、苦しそうに吐いていた。ぼくは、その光景を呆然と見つめ、やがて少しずつこゆりの傍に近寄り、背中をさすった。夕食に食べたものを全て吐き出してしまうと、こゆりは、ずるずると気が抜けたみたいに、その場にうずくまった。ふと、姉さんの言葉が、頭をよぎった。

『おめでとう』

そうか。そう言うことだったんだ。姉さんも女の子の人だ。気づくのが早いのは当然だ。

「こゆり。...これって...つわり...だよな？」

ぼくは慎重に言葉を選び、こゆりの背中を^{さす}擦り続ける。こゆりは、小さく頷いた。

「いつから？」

ビクンと背中をふるわせ、こゆりが小声で、

「...もう、生理2ヶ月きてない...」

と、言う。瞳に涙が溜まり、今にも零れそうだ....。

2ヶ月といえば、ぼくがこゆりをここに連れてきて、少し経った頃だ。ぼくは、トクトク心臓が高鳴り、口の中がカラカラに乾いてしまった。相手は？と、訊きたいのに、声がなかなか出てこない。でも、ぼくは大胆にもこう言ってしまった。

「.....ぼくの子だよな？」

こゆりは、やたら無闇に遊んだりしない。相手が、居るのなら...ぼくでしかない。

「うん。あおちゃんの子...だよ」

こゆりは、床を凝視しながら、お腹をさすり、小声で訊く。

「産んでも...」

「良いに決まっているじゃないか！こゆりとぼくの子供だよ、沢山沢山愛してあげよう」

ぼくは、こゆりをそっと抱きしめて、幸福感に浸りながら、こゆりの額に口づける。

「...ありがとう、あおちゃん」

こゆりが、嬉しそうにフワッと笑った。

続:午睡とピクニック～#6～へ、続く

文 ふありの書斎

イラスト 月猫ゆめや様

※ 続:午睡とピクニックのマガジンも作成しましたので、途中参加の方は、そちらからもご拝読下さい。